

中尾優希 (Yuki Nakao)

サントリー食品インターナショナル株式会社
食品事業部商品開発部 果汁炭酸 G

1999年 筑波大学生物学類入学
2005年 生命環境科学研究科 前期修了
2005年 サントリーホールディングス株式会社入社



予想もしない、ワクワクする明日

卒業生の声の執筆依頼をいただき、先輩方の声を参照させていただこうと HP を開いてみましたが、私の様な異端児(?)を加えていただいてもよいものか、果たして何を書こうか、かなり悩みました。しかし、学生の頃を思い出すにつれ、ふと、「今自分がサントリーでジュースを作っている姿なんて、筑波でバラ色の学生生活を送るあの頃の自分には想像もできなかったな」と思いました。ただ、あの頃の自分と今の自分は何も変わってはいない、「目の前にあることに全力にぶつかる」—それが私の明日につながるただ一つの道なのかな、と。もし今進路について悩んでいる学生さんがいらっしゃるのであれば、「なるようになるんだ」と少し気が楽になってもらえたら・・・と思いつつ筆を進めることにしました。

思えば高校生の時、「人体の不思議展」に知的好奇心をズバツと打ち抜かれたのが生物学類への道の始まりでした。とはいうものの、生物だけでは入試は突破できず、一年浪人の末、思い叶って合格、バラ色のつくば生活がスタートしました。親元を離れて生活するワクワク感、興味のあることを好きなだけできる学生生活・・・まるで「今」のことしか考えない幸せな毎日でした。しかし不思議なことに、ヒトは満足するまで好きなことをすると、少し先のことを考えるようです。大学院1年の時、「私は将来、どうなりたいのか」を少し真剣に考えたとき、目の前にあったのがサントリーのインターンシップの募集要項でした。当時、企業で働くななんて、これっぽちも考えていませんでしたが、ものは試しだと応募してみたところ幸運にも通過、その経験を終えた私はすっかり「モノづくり」に魅せられていました。たった1本のジュースでも「美味しさ」で人を幸せにできる。そんな「モノづくり」をしてみたい、と改めてサントリーの門をたたき、今に至ります。

2005年に入社、最初は「天然水」ブランドの開発・品質保証を担当しました。これまで勉強してきた知識は全く通用しない世界でしたが、どのようにお客様に安心・安全でおいしい水を届けていくかという品質保証の考え方を議論したり、山に水を汲みに行ったり、ウォーターサーバーの構造を知ろうと分解して元に戻せなくなったり・・・常に好奇心くすぐられるモノづくりの世界にのめり込んでいく自分を感じていました。

2009年に子供を出産し、1年4ヶ月の産休・育休の後、復帰と同時に異動となり、果汁・炭酸飲料の開発に就きました。子供を育てながらの仕事は、これまでのように「興味の赴くまま、自分が満足するまで」とはいかず、最初は悶々とする日々でしたが、やっとここで学生時代に鍛えていただいた「研究テーマの道筋立て」が役に立つときが来ました。仕事のゴールを見据えながら道筋を立てる。そこに向かって一つ一つ確実に検証していく。学

生の頃は全く意識していませんでしたが(先生ごめんなさい)、実はちゃんと身につけていたようです。時には時間内に終わらせることができず、持ち帰って子供が寝ている間に仕事をこなすこともあります。これも、必要であれば昼夜構わず実験していた(実は切羽詰っていただけ?) 学生生活時に培われた仕事に対する気概のかな、と思っています。そして、どんなに忙しくても「知」に対する好奇心は忘れないこと。今、研究開発部門に所属していますが、モノづくりにはマーケティングの要素が不可欠です。マーケティングを学問として勉強してみたい、と興味を持ち、社内の研修や書籍での勉強、部署に提案して講師を招いて勉強会を行ったり、好奇心を満たしながら仕事に生かしています。

学生の頃から、好奇心だけを駆動力に過ごしてきてしまいましたが、自分がここまで無事に、むしろ幸せに歩んでこれたのは周りの方の支えあってのものだ、と改めて感謝しております。寄り道ばかりする私を野放しにしながら見守ってくれた両親、博士課程に進むと宣言していたのにコロッと乗り換えて就職することにした私を応援し、サントリーに決まったときには心から喜んでくださった林先生と中田先生、能天気のように見えて実は悩み多き私の相談に昼夜構わず乗ってくれた筑波のかけがえのない友達や先輩。会社に入ってから、本気で指導して下さる先輩や、子供を持ちながら働く私に理解を示し、常にフォローして下さる上司や同僚、同期に恵まれています。そして、同じ会社で働く夫は、特にお願いしたわけでもないのに週3回以上はあった飲み会を削って、まっすぐ家に帰り家事を分担してくれたり、時には子供の送り迎えを代わってくれたりと自然に手を差し伸べてくれます。何も知らないと思っていた息子でさえ、「ママ、次はどんなジュースが出るの? 」と楽しみにしてくれているようです。いつまで働き続けられるかどうかは私にも分かりませんが、今は少し先のことだけ考えつつ、支えて応援して下さる方々に恩返ししながら美味しいモノづくりに励んでいこうと思う毎日です。

学生の皆さんも、将来自分がどうなっているのか、気になるところではあるかと思いますが、今は人との出会いや学問への興味を大切に、筑波での生活をめいっぱい満喫してください。そして、ふと気づいたときにはきっと目の前に自分が進む道が開けていると思います。その道を信じて進むこと。その先にまた幸せな毎日が待っている、と期待して。

飲み客から拍手喝采

(指導教員： 林 純一教授)

今から10年くらい前、研究室の忘年会が近くの飲み屋であり、宴もたけなわの頃、気がつくと研究室と関係のない他の大勢の客から拍手と歓声をもらっている我が研究室の女子学生がいた。男子学生（井上信一？）との一気飲みが他の客にも受けたのだ。「おいおい」と思いながらもその時は特に気にもしなかった。しかし、またしばらくすると更なる拍手喝采があったので、「このままほっとけない」と思い止めようとしたが、本人はお構いなしですっかり気を良くしてさらにビールをあおって喝采にこたえていた。どうやら彼女の記憶はそこまでらしい。この豪快な「飲みっぷり」を披露した女子学生こそ、後にサントリーに就職を決める中尾優希なのである。

彼女は生物学類生の1年生の時から目立つ存在で、普段はおしとやかなお嬢さんに見えたが、当方が世話人をしている総合科目「遺伝子がつくる文明」では多数の受講生の前で、積極的に、素晴らしい、しかし時々のをはずした質問も堂々としていた。やがて生物学類が交換学生プログラム協定を締結している英国のマンチェスター大学生物科学部に1年間留学した。留学中の様子は筆者が生物学類長の時に創刊した「つくば生物ジャーナル」の創刊号の記事（1，2）を参照されたい。

帰国後は私たちの研究室に所属して卒業研究（3）を行い、卒業研究発表会では本場仕込みの見事な英語でのプレゼンをかなり噛みながらも何とか無事に終えて卒業した（4）。その後、修士課程に進学したが、常に好奇心が旺盛で何事も失敗を恐れずに常に前向きに取り組んだ。その積極性が評価されたのか、彼女は見事にサントリーに就職を決めたのである。そしてその職場ですぐにイケメンの旦那を確保し子宝にも恵まれ、現在は仕事と育児に奮闘中である。

つい先日、年に何度か彼女が送ってくれるハーゲンタッツに対するお礼メールを出したが、すぐに返信がきて、そこには以下のことが書かれていた。

そういえば、恥ずかしいので黙っていたのですが、実は昨年総務省のHPに「ママ社員の働き方モデル」として、インタビュー動画が載りました。これです：

http://www.netrush.jp/telework_4.html

正確には、総務省の取り組みに対して委託を受けたところからの取材です。総務省の目的は、働き方を見直そう、ということだったと思います。私は恥ずかしくて見てないです（しかも、パーマかけたてのちりちりぼさぼさ頭・・・）。

そこには、学生時代そのままの彼女がいた。しかし、その表情は「育児をしながら仕事に励む」というどっしりとした落ち着きと自信に満ちていた。ちなみに彼女は「Gokuri（ゴクリ）」開発チームの一員で、かつて一気飲した大好きなあの「ビール」の担当にはまだなっていないようである。

参考記事

(1) 中尾 優希 特集：大学説明会 在校生の話-マンチェスター留学体験記-
つくば生物ジャーナル (2002) 1: 76-77.

(2) 中尾 優希 特集：マンチェスター大学に留学して
つくば生物ジャーナル (2002) 1: 98-99.

(3) 中尾 優希 老化に伴うヒトミトコンドリア機能低下の原因遺伝子の検索
つくば生物ジャーナル (2003) 2: 88.

(4) 中尾 優希 特集：卒業・退官 -大学モラトリアム満喫生活を終えて-
つくば生物ジャーナル (2003) 2: 128-129.